



## コロナが引き金、老舗かまぼこ店が自己破産

### 農林水産大臣賞など、数々の栄誉に輝く

「鈴廣」「籠清」と並ぶ、小田原かまぼこ・御三家の一角、「丸う田代」が11月27日に自己破産を申請しました。経理担当役員による横領に加え、多額の借入金も重荷となるなか、最後はコロナ禍がとどめをさす形で、150年を超える歴史に幕を下ろしました。

丸う田代の創業は、明治初期にさかのぼります。魚の吟味から煮出し、製法に至るまで試行錯誤を繰り返した末、明治10年頃に上質のかまぼこ製造に成功しました。

やがて、当社製品は県外にもその名が知られるようになり、需要も拡大。戦後、全国蒲鉾品評会に毎年出品された製品は、農林水産大臣賞や水産庁長官賞など数々の栄誉に輝き、ピーク時の1992年3月期には年売上高約25億円を計上しました。

### 売行き不振、借入金増大と経理担当役員の横領

しかし、2000年代以降は地元観光土産としての販売が鈍化します。2002年には経理担当役員のH氏（後に解任）が、8億円強の資金を20年にわたり横領していたことが発覚しました。

その後も売上は落ち込み、過去の不動産取得に伴う借入金も重荷となるなか、2020年3月期の年売上高は約14億円に低迷。

5期連続赤字となり、資金繰りにも窮する状態に陥りました。

こうした矢先に、国内で新型コロナウイルス

の感染が拡大。4月に緊急事態宣言が発出され、営業自粛の動きが広がりました。同社も例外ではなく、直営2店舗が7月中旬まで臨時休業となったうえ、箱根地区のホテル・旅館、土産店のほか、百貨店向けの販売も激減。ついには10月2日、事業継続断念に至りました。

### 制度融資を受けるだけの体力も残らず

実は、かまぼこの町・小田原で老舗業者が倒産するのは、今回が初めてではありません。業歴400年を超える「美濃屋吉兵衛商店」が、2019年6月に破産したばかりでした。

経営多角化の失敗で躓いた美濃屋に対し、同社は本業一筋を貫きました。ですが、業容拡大に伴い借入金が膨れ上がり、長年経営を圧迫し続けた点は同じでした。

丸うの借入金は年商を超え、コロナ禍の緊急時でさえ制度融資を受けられるだけの調達余力は残っていませんでした。

また、内部管理体制におけるガバナンスの甘さも酷似します。同社の場合、20年もの間、経理担当役員による横領を看過し、自社の経営体力を奪う遠因となりました。

10月1日、政府の観光支援事業「Go To トラベル」の対象に東京発着旅行が追加されました。「たら」「れば」をいっても仕方ありませんが、この追加決定がもう少し早く行なわれていれば、最大の書き入れ時である年末商戦を前に、150年を超える歴史に幕を下ろす最悪の事態は避けられたのかもしれません。

**ないう おさむ** 2000年に株式会社帝国データバンク入社。本社情報部、産業調査部、東京支社情報部を経て2018年10月より現職。入社以来一貫して、倒産企業の取材、倒産動向のマクロ分析を手がける。専門は倒産動向分析、企業再生研究。